

業 界 短 信

(20年10月1日～10月31日)

日鉄神鋼シャーリング、母材ヤード拡張工事開始 (鉄鋼新聞、10/1)

㈱日鉄神鋼シャーリング (大阪市此花区、木村秀明社長) は、9月から本社工場の母材ヤードの拡張工事を開始した。工事は建屋を1250平方メートルを増築し、工場・倉庫の建屋面積を9050平方メートルとするもので、完成は今年23月頃を予定している。投下金額は約4億円。

三幸金属工業所、新型アンコイラー導入 (鉄鋼新聞、10/2)

㈱三幸金属工業所 (堺市堺区、楠本雄宏社長) は鋼板加工ラインメーカーと共同開発した新型アンコイラーをジャンボレベラーライン (最大厚み22ミリ、幅2170ミリ) に導入、本格稼働を開始した。厚物コイルの緩みキズを防止できる独自装置が最大の特徴で、新型アンコイラーの導入により厚物コイルの製品歩留り率が10%以上向上したという。

日鉄神鋼シャーリング、月3000トンを維持し体質強化 (鉄鋼新聞、10/6)

㈱日鉄神鋼シャーリング (大阪市此花区、木村秀明社長) は、09年度を起点とする次期中期経営計画の骨子を明らかにした。切板数量は月間3000トンを維持・継続し、これをベースに体質強化してゆく。具体的には新管理ネットワークシステムを構築し、作業効率と歩留まりの向上を図る。事業基盤の見直しも行い、マネジメントの強化を行うとともに、見直しに沿った設備投資も行う。小物加工のラインファイナル化を進め、省力化、コスト低減を図る。業績目標は計画最終年度の11年度にROS (売上高経常利益率) 3%の確保を目指す。

平和鋼材、NC溶断機を更新 (産業新聞、10/20)

平和鋼材㈱ (大阪府東大阪市、松本邦夫社長) は、今年11月にも

NC 溶断機 1 基を更新する。設備の老朽化に対応するもので、更新後は切板精度の向上を図るとともに、切板の単品・小ロットの要望にさらにきめ細かく応じていく方針。同社は第 1 工場、第 2 工場を有し、NC 溶断機 7 基、ポータブル溶断機 1 2 基、鋸盤 4 基を持っている。直近の切断量は 700-800 トン。特徴は極厚物の切板を得意としており、地域密着型の加工を展開している。

丸定産業、ベトナム合弁に注力（産業新聞、10/20）

丸定産業(株)（愛知県東海市、瀧上亮三社長）は、瀧上やメタルワン、等と設立した、ベトナムの鉄骨加工会社に対し、溶断加工分野での協力を進めていく。年内に丸定の溶断設備を移設するとともに、今後研修生の受け入れや技術指導などにも注力し、将来的には現地での溶断会社設立の可能性も探っていく考えだ。

シーヤリング工場、熱処理炉工事を開始（産業新聞、10/22）

(株)シーヤリング工場（堺市堺区、永吉明彦社長）は今月から、本社工場の熱処理炉の導入工事を開始した。同工事は、30 億円強を投じて、本社工場の第 1 棟に熱処理炉、装入装置、レベラーなどを設置するもので、来年 9 月には完成、同 10 月から稼働させる。今回の設備導入は親会社の住友金属工業のハイエンド化に連動したもので、稼働後は住金からの賃加工を主体に、月間 2500 トンの熱処理を目指す。なお、熱処理炉の対象寸法は板厚が 6~22 ミリ、板幅が最大で 2500 ミリ、板長さが最大 14 メートル。処理能力は月間 2500 トン。

村山鋼材、浦安の置き場能力倍増（鉄鋼新聞、10/22）

村山鋼材(株)（東京都大田区、村山和雄社長）は、浦安工場のコイル置き場能力を増強し、併せて物流効率化と安全性の向上も実現した。地盤沈下によって凹凸が生じた地盤を改良・整地し、コイル専用置き台を 300 個設置。置場の安定感を高め、単重 20 トンコイル換算で 2 段積み時に従来のほぼ倍増の計 1 万 2 千トンを積める。ヤード中央にはトレーラー通路を設け、荷降ろし作業を効率・迅速化した。総投資額は約 2 億円。

東海鋼材工業、NC ガス溶断機更新（産業新聞、10/23）

東海鋼材工業(株)（愛知県海部郡、後藤實社長）の鋼板加工事業部は、納期や加工品質の向上に向けた取り組みを強化している。ベースとなる切断加工分野でNC ガス溶断機1基を新鋭機に更新したほか、2次加工分野ではロボットを計3基増・新設。ともに10月から本稼働を開始している。加工体制の着実な拡充を図ることで、ユーザーニーズへの対応力を従来以上に高めていく方針である。同社の鋼板加工事業部はNC ガス10基、レーザ3基、プラズマ2基などを擁し、橋梁及び産業機械向けの加工を行っている。加工量は月間平均で橋梁向け約1000ト、産業機械向け約2000ト。

新潟スチール、三条、柏崎に最新鋭設備導入（鉄鋼新聞、10/28）

新潟スチール(株)（新潟県三条市、真柄修社長）は、今月中旬、老朽化設備を棄却し、三条工場でレーザ、柏崎工場でプラズマを新規導入した。堅調な鉄骨向けニーズをとらえ、切板加工に特化し加工能力・生産性を高めていく。三条工場はレーザ稼働を10月中旬から開始、板厚12ミリ以下に特化し夜間操業も行う。既存のプレーナー1基、アイトレーサー2基と併せ月産400ト体制を目指す。柏崎工場はプラズマを9月中旬より稼働。プラズマ2基、アイトレーサー3基体制となり、月産440トが目標。投資金額は9200万円。

JFE 鋼材が溶断競技大会（日金通、10/28）

JFE 鋼材(株)（東京都中央区、吉里勉社長）は、今日25日、全社溶断競技大会を東京事業所で開催、東北から福山までの全事業所から選抜された若手社員10人がしのぎを削った。この競技大会は同社が若手育成と技能伝承を兼ねて毎年の恒例行事として復活させたもの。昨年に続く連続開催となる。この大会ではIカットや開先の手作業による加工と筆記試験、日頃の勤務状況などを踏まえ総合的見地から評価する仕組みとなっている。大会の受賞者は最優秀賞1人、優秀賞2人。

千曲鋼材、茨城で工場竣工式（産業新聞、10/31）

NS 富田の設立と工場竣工、千曲鋼材(株)（千葉県浦安市、神島勉社長）

の茨城事業所の増築竣工を記念した祝賀会が30日開催された。両工場は千曲鋼材茨城事業所敷地内の新工場棟に併設され、10月から稼働を開始した。建機メーカー・コマツをメインユーザーに、溶断から溶接製缶、塗装までの一貫生産体制を確立する。加工工場(2棟)は3483平方メートル、塗装工場が753平方メートル、事務所棟が220平方メートル、溶接ロボット5式、溶接機30台、大型塗装ブースなどの設備をもつ。千曲鋼材も部材供給能力向上のため、NS富田工場に併設する形で、工場2470平方メートルを増築。板厚36ミリまで対応可能なプラズマ1基を新設した。

近江産業、ミルシート付規格材に全量切替え(鉄鋼新聞、10/31)

近江業(株)(大阪市中央区、小八木規之社長)は、熱延、酸洗鋼板加工販売の全量をミルシート付き規格品に切り替えた。自社販売の鋼板についてもミルシート付規格品の扱い比率を高め、素材履歴を把握できる規格品に切り替えていく方針である。鶴浜鉄鋼センターのシート加工品販売は造船や大型機械プラント、橋梁など大手需要家向けが主力。シート加工から、ショットプライマー、穴あけ加工など2、3次加工を施したものが多く、需要家の厳しい品質管理要請から自販用シート加工の全量をミルシート付き規格品に切り替えた。